

# 核兵器なくそう・世界青年のつどい

5年連続開催をふりかえって

2010年5月

核兵器なくそう・世界青年のつどい準備委員会

## 1) 「つどい」5年間の歩み

核兵器なくそう・世界青年のつどい(以下「つどい」)は、フランス平和運動(Mouvement de la Paix)の代表が被爆60周年の2005年8月に「世界青年集会」を開催しようと提案したことをきっかけに始まり、以来、毎年静岡、広島、長崎で開催。また国内だけでなく2005年と2010年のNPT再検討会議にあわせてニューヨークで、2006年6月には世界平和フォーラムにあわせてカナダ・バンクーバーでも開催してきました。

これまでアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国、インドといった核保有国をはじめ、カナダ、ドイツ、イタリア、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、リトアニア、ウズベキスタン、カザフスタン、フィジー、ニュージーランド、韓国などから参加。この5年間で日本と海外からのべ1万3793人が参加しました。日本原水協と原水爆禁止世界大会実行委員会の組織的財政的援助を受けながら、「つどい」を通じて核兵器のない世界を願う青年の声と行動を国内外に大きく広げてきました。

「つどい」の開催にあたっては1年ごとに団体・個人に呼びかけて準備委員会を立ち上げ、「核兵器をなくそう」という青年自身の想いに応える自主的な企画・運営をはかってきました。参加者のチケット代を基礎にカンパや賛同募金で経費をまかない、多くの青年組織やボランティアなどの協力によって支えられて継続できました。

## 2) 「つどい」の到達点

2010年「つどい in ニューヨーク」を終えた準備委員会は、これまでの5年連続開催をふりかえり「つどい」の到達点について次の諸点を確認しました。

被爆国日本と世界の青年が「核兵器なくそう」の一致点で共同し、被爆地広島と長崎で大規模な国際的若年集会を開催し成功させたこと。

「つどい」の重要なテーマとして掲げた“継承と発信”は、被爆者の体験や願いを自らのものとして受け止め、多くの青年が行動を起こすなど積極的に受け止められたこと。

被爆証言や活動交流を通じて、参加した青年たちに「連帯することの大切さ」「共同の力」を実感させ、「人類と核兵器は共存できない」との確信と決意を広げたこと。

2007年から呼びかけた「21万羽おりづるプロジェクト」を通じ、かつてなく世代、地域をこえた対話や行動を広げたこと。

## 3) まとめ

運営体制は必ずしも十分ではありませんでしたが、日本と世界の青年の核兵器廃絶運動の発展に「つどい」が大きな役割を果たしてきたと言えます。

被爆者の平均年齢が76歳と高齢化するなか、被爆国日本の青年の草の根運動をもう一度しっかりと構築する時にきています。今後も参加した青年たちが、「つどい」の成果を各地・各団体でさらに大きく発展させると確信します。

以上